

発掘ニュース

第 11 号

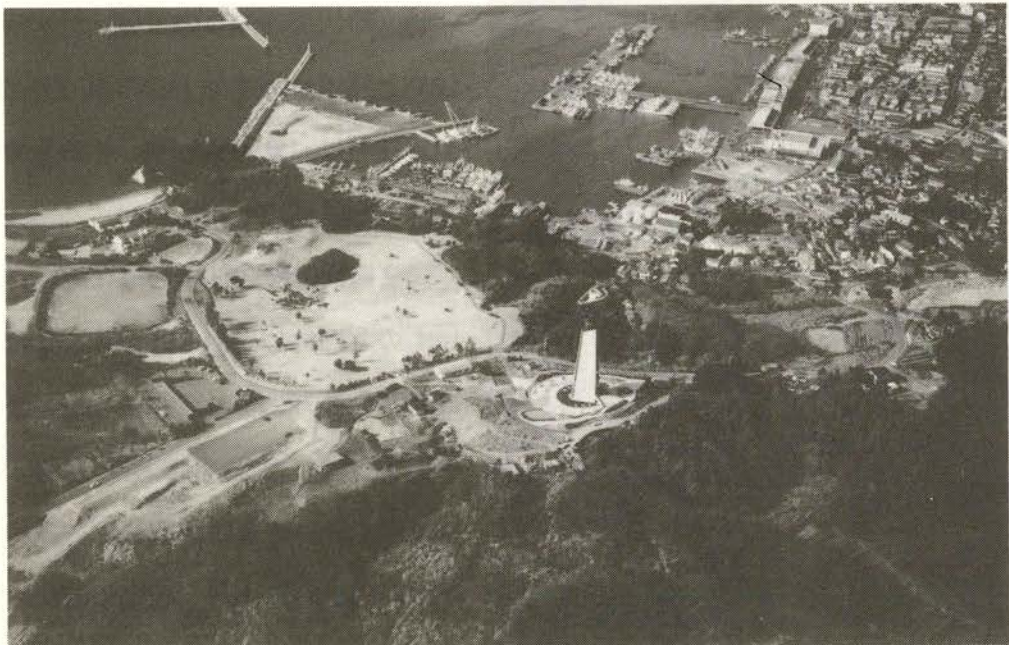
昭和61年3月25日

発行 財団法人いわき市教育文化事業団

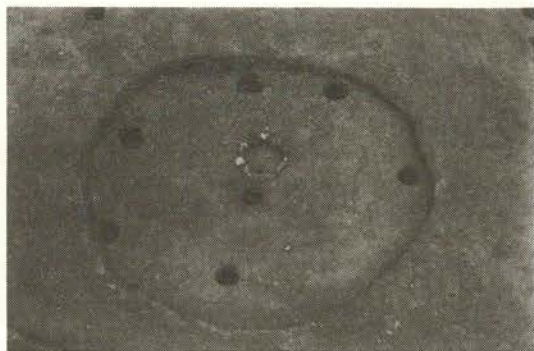
つな とり かい づか 綱 取 貝 塚 ——縄文集落の調査——

綱取貝塚は、太平洋を一望できる三崎公園の高台に位置します。昨年11月より始まった第5次・第6次調査によって、縄文時代の住居跡が5棟みつけられました。これらは、竪穴式住居と呼ばれるもので、すべて、楕円形のかたちをしています。この住居跡からは、土器や石器のほかに、シカの角や骨・イノシシの骨・サメの歯・貝殻片などがたくさん出土し、縄文人がつくった道具や食糧の一部を知ることができました。

今回の調査によって発見された竪穴住居跡やたくさんの遺物から、この三崎台地を拠点とした縄文時代の人々のくらしがよくわかるようになりました。



第 1 図 空からみた綱取貝塚



第 2 図 縄文後期の竪穴住居跡



第 3 図 柱をたてる



第 4 図 屋根の骨組みをつくる



第 5 図 藤つるなどでしはる

じょうもんじだい じゅうきよ 縄文時代の住居

大むかしの人々は、みなほら穴に住んでいたと信じていた人が多いようです。たしかに、石灰岩地帯などでは、自然の洞穴や岩かげが、住まいとして利用されています。しかし、ヨーロッパでも日本でも野天に住んでいたのが普通で、ほら穴に住むのは特殊な例です。現在、縄文時代でも古いころの住居の跡として知られているものに、ほら穴などが多いのは、研究者がそういうところを中心にさがして歩いた結果なのです。

縄文時代のふつうの家は、竪穴式住居と呼ばれる半地下式の家でした。竪穴住居は、夏すずしく、冬あたたかいのが特徴です。

縄文時代の竪穴住居の形には、丸いものと四角いものがあり、これは時期や地方によってかわっています。広さは、ふつ、う四畳半から十畳ぶんぐらいですが網取貝塚で見つかったのは、およそ八畳ぶんの広さです。

じょうもんじゅうきよ ふくげん
縄文住居の復原

竪穴住居の柱や屋根は、のこりにくいので、発掘調査をしても、どんな材料を使い、どんな屋根の形をしていたのか、なかなかよくわかりません。そこで、住居跡の形や大きさ、柱の数や位置などから推測して、縄文時代の住居を復原してみました。

竪穴住居跡よりみつかった柱のあとは、中央に1個、まわりに6個あることから、屋根は安定性のある円錐形と考えられます。

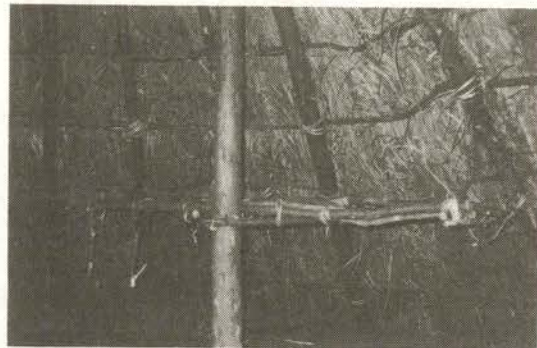
まず、周辺の山や野原から、雑木・垂木・藤つる・カヤなどの材料を採集し、柱をたて、屋根の骨組みをつくって、カヤを葺き上げました。とくに、カヤは直径10cm程のたばを460たばも使いました。このように、縄文時代の人々は、石の斧で木を切ったり、穴を掘ったり、石のナイフで木の皮をむいたり、草を切ったりして、自分たちの住居をいろいろ工夫してつくったものと考えられます。



第6図 カヤを下から葺く



第7図 屋根ができあがる



第8図 住居のなか



第9図 縄文後期の復原住居



第10図 土器片錘



第11図 石 錘

じょうもんじだい しよくせいかつ
縄文時代の食生活

網取に生きた縄文時代の人々の食べ物は、この自然環境等から、四季折々の海の幸・山の幸、動物や鳥类等バラエティーに富んでいたと思われます。網取貝塚より出土した遺物から、サザエ・マキガイ・アワビ・カキガイ・ハマグリ・マダイ・サメ等の魚貝類、イノシシ・シカ等の動物、また、凹石・たたき石から、クルミ等の木の実も食べていたことがわかります。そして、土器片錘や石錘が多く出土していることから、網漁法による魚の捕獲も盛んに行われていたと思われます。

縄文時代の住居をみて

泉小学校 6年 高木 祐司

ぼくは、2月2日の現地説明会の時に、先生や友達と一緒に三崎公園へ行って、始めて縄文時代の復原住居を見ました。そして、すごいと思ったことは、大むかしの人々は、くぎを使わず、草などをひもにして、それでしばって自分たちの家を作っていたということです。この縄文時代の住居に少しでもいいから住んでみたいと思いました。その復原住居がこわされたと聞き、いわきマリントワーは「未来」、復原住居は「過去」で、よくあっていたのに残念です。

(お知らせ) NHK教育テレビの「くらしの歴史」という番組のなかで、網取貝塚が紹介されます。4月21日(月) 11:45~12:00、4月23日(水) 14:15~14:30、4月25日(金) 11:15~11:30に放送予定です。

発行
編集

昭和61年3月25日
財団法人いわき市教育文化事業団 (電話) 23-9348
福島県いわき市平字堂根町1-4、文化センター5階